ふかまちのまど

第八十三号　二〇〇一年三月一日
発行元　深町　町内会連合会
連絡所　☎六三―三八八七

ふかまちの自然への想い（5）

小林龍一郎

「秋の里川―もずくがに」

深の里が紅葉で映え、川が燃える頃になると思い出す。特上の腕白たちに、密かにカニ汁とカニ飯と塩ゆでカニ等を堪能させることができるかと学校前の藤井川の中を歩き回ったことを。学校前の堰堤がまだ河川改修されていないころが懐かしい。

手のひらぐらいのカワガニで、両方のはさみに長くて柔らかいモズクのような毛があるのが特徴。そのことから「モズクガニ」と呼ばれている。確かに藤川八重子さん宅の西、町民会館の前では石の下に見つけることができた。目と目のあいだは波状となっていて、泡を吹きながら、きりっと立てた触覚と、目は厳しい目つきで私を凝視していた。

腹部の折り畳まれたところを俗にフンドシと呼んでいるが、これで雌雄や未成体・成体の区別ができる。

雄は鋭三角棒のような形、雌は未成体が三角形から釣り鐘状、成体は楕円形から円形となっている。成体となって繁殖できるようになると、雌のフンドシには、はさみがあるような深い毛がまわりにしっかりとついてくる。

これは人間の成長とよく似ていて、産卵した卵の安全を守る保護のためか、受精のためであるらしい。成体となるまでにほぼ同じ場所で三年くらいはとどまっている。

生まれてから成体となるまでに、十八から二十回ぐらい脱皮を繰り返すので、海に降りていかない期間が長い。そこで、その一生を川で生活していると誤解される。最後の脱皮をして成体となると繁殖期に入り、秋雨で川が濁るのを待って、松永湾めがけて月の出ない夜間に川を降りる。ここを人間に狙われる。

松永湾の河口では気水域が産卵場所である。産卵後、プランクトンのような生活から、稚ガニとなって淡水域をめがけて半年後再び川を上がり始める。

この時、元気のいい稚ガニが色々な障害を乗り越え、川の最上流域まで達するらしい。この時の甲羅の大きさは甲幅一～二センチ程度、全てが上流をめざすのではなく、遡上する間にグループから抜けて、その水域に定着するものが出てくる。藤井川流域に全てに生息しているのはこのためである。

面白いことに、カニの足先には食物の可否の判定ができる触手の感覚があるようで、岩穴から先ず足先を出して、獲物の体を触り、次にはさみで獲物を岩陰に引き込むという行動をする。川の中にうずくまり、カニと餌の駆け引きをしていると時間のたつのも忘れすぐ夕方になる。肺臓ジストマの中間宿主なので、調理には注意が必要である。

藤井川を松永湾まで河川の変化を調べて歩いたことがある。三成の消防署分署の北側あたりには、カニカゴが仕掛けられていた。やはり仲間はいるものである。

―「地方名の多いこのカニの名前を深町ではなんと呼んでいるのか教えてください」。

次回は栗鼠（リス）または柿 ▲▲

オーストラリア航路の思い出（2）

秋本　俊之

南支那海を南下し、ボルネオ島とマレー半島の間を南下すると、インドネシア共和国の海域に入ります。ここは赤道直下で、風も殆ど無く海も静かで、時折スコールに見舞われます。思わぬ時に空に雲の塊が襲って来て、一時ざあっと激しい雨を降らせて、さっと通過して行きます。又、時には静かな海が急に夕立の様なざあっと音がするのでデッキに出てみると、シャチに追われたイワシの大群が、海面すれすれに逃げる時には、飛び魚がデッキに飛び込んでくることがあります。海の中でも弱肉強食の闘いが繰り返されている様子が見られます。

ボルネオ島の西のジャワ海を更に南下すると、ジャワ島のスラバヤ港に入港します。日本を出てから約十日位の航海でした。

途中の小さな島の海岸には、海の上に丸太を組み、その上に住宅を作っている現地人の家も数軒ありました。船が入港すると小さな手漕の伝馬船を漕いでバナナやマンゴ、ボルネオダイヤや細工物等を売りにやって来ます。船員達は、日本からの綿製品や煙草等での物々交換をしたり、お金で買ったりします。

私も小さい宝石箱からピンセットで大切そうに取り出した「ボルネオダイヤ」と称するものを買い、横浜に帰って宝石屋で鑑定してもらいましたが、「これはガラスです」と言われがっかりしたことを覚えて居ります。

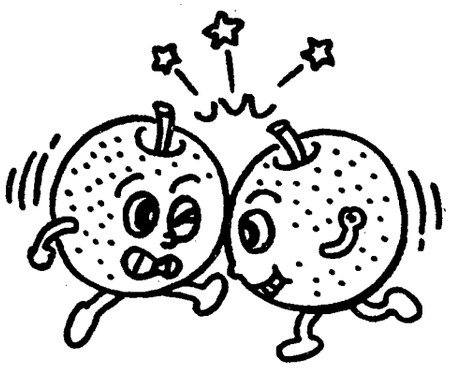
スラバヤの停泊は四・五日なので荷役中上陸して市街に遊びに出掛けます。街に出る前に、行き先の街の名前や帰る時の街の名前をマッチ箱に書いて馬車の御者に教えます。港には小さい驢馬の前に鈴をつけた可愛い馬車がお客を待って下ります。行く先の町の名は「パッサルブッサル」「帰る時は「タンジョンペラ」と告げると馬車は走り出します。

馬の首の鈴をチリンチリンと鳴らしながら走る気持ちは中々ロマンチックなものです。走る行程は二・三キロで街に到着しますが、スラバヤの街も中々賑やかでした、

街も各国人の街があり中国人（華僑）の街のとても賑やかで活気がある街ですが、実に雑然として居り汚い街でした。

街を散歩していると、現地人の裸足の子ども（小学一年位）が、「シガレットサービス」と言いながら後をつけて来ます。一人に与えると又一人と云うように後を追いかけて来ます。

街のスーパーに立ち寄り煙草用のライターを買い持ち帰りました。当時日本には無く、「しめた」と思いながらよく見ると「メイドインジャパン」と書いてあり、こんなものまで輸出しているのかと思いました。▲▲



深町の想い出

吉田　稔

私は隣町中之町に住む深町を故郷とする者です。少年時代・青年時代を当時深田村から、三原市深町へと地名の変わった深町に育ち、懐かしい想い出を作ってくれた郷土と、その地の人々について関心を抱き続けています。

そして、今も年老いた母が深町で一人暮らしをしており、地域の皆様の温かい思いやりお心配りを受けていることを、大変有り難く思っています。

◆◆◆

謹んでお悔み申し上げます

★綱掛八重子様　八四歳　一月三一日

町内各種団体三月行事予定

◆小学校（幼）
▼マラソン大会――三日
▼誕生会（幼）――三日
▼参観日・期末懇談（少・幼）六日
▼卒園織（幼）――一九日
▼卒業式――三三日

◆こども会
▼お別れ会――二〇日

◆女性会
▼親睦会　上――八日
　　中――三日
　　下――一日

展望席

第二次世界大戦末期の昭和二十年（一九四五）四月に深国民学校へ入学し、中組の千川神社で正座して、神主さんからお祓いを受けたことを鮮明に覚えています。

出征兵士を見送って久山田（現尾道市）との境にある峠で万歳をしたこと、福山大空襲で山の上から見た真っ赤になった東の空や、米軍が落とした焼夷弾による山火事は、悲惨な戦争体験ではないが、あの戦争が起した数々の事が私の記憶にあります。

次号に続く

少年問題、とりわけ学校でのいじめ、教師への暴力、学級崩壊が起きると多くの報道機関は一斉に学校へ走る。その反面、学校の抱える問題点については現場の声があまり聞こえて来ない。最近の報道を見て感じられることを断片的だが書いてみたい。

▼「荒れる成人式」は、多くのマスメディアが取り上げ話題を呼んだ。式典形骸化や統制への抗議であれば出席することはないのである。騒いだ後で謝ることは更にない。同じような「荒れ」が日教組第五〇回全国教研集会であった。「来賓として招待された東京都の横山教育長の祝辞の最中に、『おまえの来る所じゃあない。悪魔・右翼・帰れ』といったヤジが方々から聞こえた」。▼これはある週刊誌の抜粋。他にも一部全国紙がコラムや社会面で取り上げた。これらを読んで思うことは、初めに書いたが、学校内で起きた生徒のトラブル情報量に対し、教える側の発信量が非常に少ないように思う。「教師の思い」をもっと率直に語ってほしい。

▼三月号である月刊誌が、「親たちよ！教師たちよ！」という特集を組んでいる。そのなかで全国に話題を撒いた芦品郡神辺西中学校　校長藤原幸博氏が、「中学生出席停止私の決断」と題した一文を書いて居られる。決断に到る過程が克明に記してあり説得力があった。「勇断」は管理者必須の条件。（文中傍線筆者）

深町歴史散策 (5)

高崎　壽郎

明治新政府が「必ず邑(むら)に不学の戸なく、家に不学の人無からしめん事を期す」と、学制を公布し、それに基づく近代的な教育制度を創始したのは、明治五年(一八七二)であった。

それをうけて、御調郡深村では、翌年即ち明治六年(一八七三)三月、上組金剛寺内に小学校(喬盈舎)を設置し、子ども達の教育に当たった。

明治六年(一八七三)の開校は、三原市内では明治五年(一八七二)開校の小泉小学校・沼田西小学校に次ぐもので、古い歴史のある学校である。

これは、村民が教育への関心が高く、勉学の大切さをよく認識していた証左。

喬盈舎は、明治六年(一八七三)から、明治九年(一八七六)までのわずか三年間の学校だった。

初代の大下良海先生は、明治六年(一八七三)三月から明治七年(一八七四)九月までの一・七年の在任期間であった。出身地が金剛寺(昭和三八年発行の深郷土誌)になっており、和尚さんが住職兼務で子ども達の教育に当られたと考えられる。

氏松常宮都宇

二代の宇都宮常松先生は、明治七年(一八七四)九月から明治九年(一八七六)十一月まで二年九ケ月三原市本町から通われた。おそらく徒歩だったと思われる。

先生の教師生活は深だけで終わり、若くして東野村(現在の糸崎町・寺町・時貞町・宏町・東城通り・東町)の副戸長になられた。次いで因島中庄村戸長から中庄村村長の要職に就かれ、永く村のために尽力された。

学校は初めは寺子屋的なものだったと想像される。学校設立当初は義務的なものではなく、農繁期などには家の手伝いで学校を休む子も多かった。子ども達はみんな徒歩で、下組の子は綱掛峠や稚子峠を越えて通学した。

勉強は「読み、書き、ソロバン」で、読むこと、書くこと、計算することを習った。それは

聴いてください

第四回定期演奏会

吹奏楽部保護者会　成末朋子

如水館中・高等学校吹奏学部は、創部以来大きく発展してまいりました。これも地域の皆様方の温かいご支援ご協力を頂きましたおかげです。

皆様方のお力添えで、今までの成果を出す事が出来ました事を感謝しております。

ありがとうございました。

今年度は、静岡県で開催される第二十四回全国高等学校総合文化祭に広島県代表として出場し、「文化連盟賞」を受賞できました事を始め、第四十一回広島県吹奏楽コンクールA部門に於て二年連続の「金賞」を受賞、第二十四回広島県高等学校総合文化祭総合開会式では、吹奏楽部門を代表して演奏、第二十四回アンサンブルコンテストで、金管八重奏、クラリネット四重奏、サックス四重奏の三チームが「金賞」を受賞しました。

また、我が家の中学三年生の二女、香里も打楽器五重奏に出場し、「銀賞」を受賞する事ができました。

山中学園六十周年を記念して開催された、ルーマニア国立歌劇団との共演、その他にも様々な方面での活動を行ない、たくさんのすばらしい経験をさせて頂き、力を付けてまいりました。

この「第四回定期演奏会」を少しでも皆様方に楽しんで頂けるものとなります様顧問の千鶴高弘先生の熱意ある御指導を頂き部員一同一丸となって、日々練習に励んでおります。

堅苦しい曲だけでなく、懐かしい曲や、ヒット曲など折り混ぜた楽しい演奏会です。是非御来場下さいます様御案内します。

記

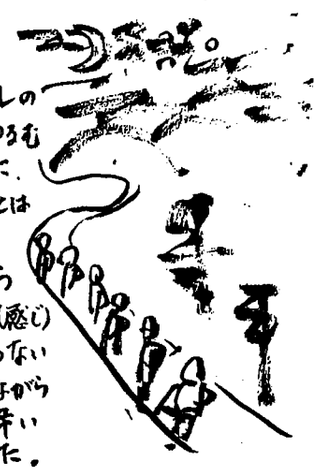
開催月日　三月二十日
開演時間　午後一時三〇分
開催場所　三原リージョンプラザ文化ホール

入場無料です。

ボクの集団疎開の思い出

(元)大阪市立海老江東国民学校
2ねん　ニシダカツヒコ

終戦のころ(3)



・ベルトの思い出
ボクのベルトのバックルの調子が悪くバンドがゆるむのです。保護者会の方に、お願いしたのに届くことはありませんでした。
最後の晩、深田村から駅まで夜通し歩いた(感じ)のですが、ズボンがずらないように、片手でずりの張りながら行進したのは、本当に辛い情けない思い出でした。

・ゴーグルの思い出　お土産に1人1個づつ、航空兵の防塵眼鏡を頂いて車中から出したり入れたりしていたのが、帰宅したら、見当らず宝物を失くしたように残念な思い出でした。

孫ら去(い)に雛人形の踊り出す　麦畝

ねこやなぎ　喜

寒さの中にもあちこちに春の息吹を感じる頃になりました。深町の皆様にはますますご健勝のことお慶び申しあげます。

早いもので、今年度もあと一ケ月を残すばかりになりました。深幼稚園小学校の子どもたちも「あと〇日じゃ。」と話しながら、最後の学年のまとめや文集作りにがんばっているところです。

先月二一日に教育委員会から、ジェーン・アードレイさんを招いて「英語に親しむ」ことを通して、外国の人々の文化や生活の一端に触れる体験をしました。毎年、体験している子どもたちは、「ハロー、ナイスミーチュー！」と笑顔で話しておりました。ジェーンさんの話によりますと、小さい学年であればあるほど、英会話への抵抗が少なく、楽しそうにはなしてくれるそうです。

帰るジェーンさんに「シーユーアゲイン、グッバイ！」とニッコリのこどもたち。楽しい一日を過ごしたようです。

今年も一年間、何かとご支援をいただき、ありがとうございました。来年度もよろしくお願いいたします。

深小だより

社会生活にすぐ役立つものだった。

子どもの数は記録にないが、一教室、一教師の学校であった。▲▲

ふるさと賛歌 (8)

石井　良雄

五、山陽道の山越えは
稚子峠　東口
道しるべから　五・六分
曲りの上の　赤子石
弘法大師の　杖のあと
赤子の小さい　足の型
ここは捨子に　よい所

六、春は子どもの　目白とり
桃の節句は　山登り
夏は水泳　もんや池
底にもぐって　粘土とり
秋は松茸　きのことり
水晶さがしも　したっけね
冬は　地蜂や猫退治

注記
地蜂＝土の中に卵をうみつける蜂の幼虫を食べる
猫退治＝野良猫を追いまわす

鐘ひとつ

毎週日曜日にはNHKのど自慢大会が全国各地を舞台に行われ、開催地の「お国自慢」もサービスの一つのようです。

二月十一日は南国高知県の小学校体育館で行なわれたのど自慢も、ユーモアを交えた熱演で楽しませてくれました。

その中で、私の視線を引きつけたのは開催地小学校の三十歳前後の男子先生の熱唱でした。が、残念ながら「鐘ひとつ」。出場の動機は開催地小学校(教師像)のPRのようでしたがその目的は果たされたようです。

司会者が「今日の出場のため眼鏡を新調されたようですね」と問いかけると、「はい」と答えて眼鏡に手をかけるが鏡が無い。「今度出演する時には鏡を入れて出ます」。

子どもの非行・不登校が話題となる昨今ですが、児童生徒が全てを話し、先生の説得に応ずるのは、このタイプの先生のような気がするのですが：「子どもに親しまれる教師とは」を考えさせられたのど自慢でした。